

令和7年度
広島県瀬戸内高等学校推薦入学試験問題

国語

(50 分)

..... 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いて見ないこと。
2. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。
3. 問題・解答用紙に落丁、乱丁、印刷不明な箇所があれば申し出ること。
4. 問題・解答用紙の指定欄の太枠内に、受験番号を忘れずに記入すること。
5. 問題・答案は試験終了後、監督員の指示によって回収するので、終了の合図までそのまま静かに着席していること。
6. 余白は自由に使って良い。

受験
番号

--

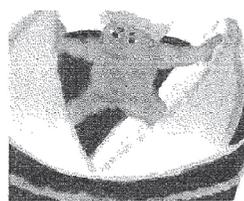
【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

絵 A



『ももたろう』A (文不詳／岩崎良信、絵／小学館育児絵本)

絵 B



『ももたろう』B (松居直、文／赤羽末吉、画／福音館書店)

ここに二枚の絵があります。見ておわかりのとおり、日本の昔話「ももたろう」の絵本の一場面。ももたろうが桃から生まれた瞬間を描いたものです。

授業で学生たちにこの絵を見せ、どちらが好きかときくと、九割以上、《 》ほとんどの学生がAと答えます。「かわいい」というのです。二〇〇八、〇九年になると、赤羽末吉の描く「ももたろう」は「気持ちが悪い」という学生まで現れるようになりました。このどことが気持ちが悪いのか、私は少しつつこんできいてみました。はっきりした答えは得られませんでした。が、推し量るところ、あまりリアルで、生理的に嫌悪感を覚えるということらしい。「でも、こんな人形のような赤ちゃんはいないでしょ？」と言うと、「ただど……。」と不服そうでした。

(中略)

A がかわいくて好きという学生たちに、私はさらにききました。

「私もつい、かわいいと思ってしまうのだけれど、でも、なぜそう思うのだろう?」

学生たちは答えません。

「かわいいはかわいいじゃん。それになんのわけがあるの?」

と言いたそうな顔をしています。しばらく待って、私は問いかけました。

「この二人の赤ちゃんを膝にだっこするとして、どちらの赤ちゃんが先にむずかりだすかしら? どちらの赤ちゃんが先に膝から出ようとするかしら?」

学生たちはようやく気付きます。かわいいももたろうはいつまでも大人の膝におとなしく抱っこされているだろう赤ちゃんであることに。

私は、ここまでくると、よく授業をダツセンaしました。さらにもう少し「カワイイ」の意味を学生たちといっしょに考えたくなってしまうのです。

「私は、かわいいおばあちゃんbになんかなりたくないと思ってるわ」

いつか学生たちの母親の年齢を過ぎ、そろそろ祖母の年齢に達した私は言ったものです。

「かわいいおばあちゃんbってなあに？ 誰がなるんですか」

学生たちはちよつとびつくりした顔をします。私は続けました。

「あなたたちはカワイイ女の子が好きなのよね」

私はチヨウハツbにかかります。

『カワイイ女の子でありたい』『カワイイ女の子になりたい』と思ってる。そうじゃない？ だからデートするときも、本当は自分たちがおかれている状況や、これからどう生きていいかといったことを話したくても、そんなこと話したら生意気、って思われるからと自分の本当の思いはひっこめて、食べものやファッションのこと、話してる。相手の男の子も、本当は今の世界の動きや政治のこと、これからの人生について等いつぱい話したいのに、そんなこと話したら、暗いやつ、うつとうしいやつ、重いやつと思われそうだからって、断片的な街の情報ばかりを口にしてる。そうやってお互い牽制けんせいしながら、お手々つないでぶつぶいっしょに墮ちおていくんだ。まあ、墮ちていきたい人は墮ちていけばいいけどね」

私は続けます。(i)

「でも、これから生きだそうとする子ども、自分の足で立とうとする子どもを、カワイイ2にとじこめる権利は私にもあなたたちにもないはず。「ももたろう」はいつまでもお母さんの膝にのっついてはいけない。いつかお母さんの腕を押しつけて広い世界に出て行かなくてはならないし、あなたたちが保育の現場、幼児教育の現場に出て行って会う子どもたちも、いつまでもあなたたちのかわいいペットでいてはいけないんじゃないかしら」

ここまできてやつと学生たちは「そうかあ」とわかった顔をし始めます。(ii)

何年前から私は、ある司法関係の研修所でも『ももたろう』の二枚の絵を見せることを始めました。相手はいわゆる、非行少年2とかかわる機会も多い人たちです。勤務先の短大で学生たちにしてきたように、どちらが好きか、尋ねてみるのです。今のところ、反応は短大の学生と全く同じです。五〇人近い研修生のうち I の「ももたろう」がいいという人は、三、四人。あとはみんな II の「ももたろう」が好きだと言います。

「よくまあ、それで一〇代の人たちと向き合えますね」

私は時々嫌みを言います。目の前の研修生たちがこれから出会うのは、たぶんⅢの「ももたろう」ではない。いえ、かつてそうであったとしても、その苦しさに耐えられなくて、Ⅳの「ももたろう」のように生きたいと願い、でも、Bの「ももたろう」が物語の中でその後生きたようにはうまく生きられないでいる人たちが大半であるはずだ。(iii)

大人にとって、子どもがAの「ももたろう」のようであつてくれたら、どんなにらくでしよう。^③ そんな子どもと向き合う大人の地位はどこまでも安泰で、おびやかされることはありません。問いを突きつけられることもなく、したがって自らをヘンカクする^d必要もありません。力ある者はその力による支配を脅かされる心配のないものを「カワイイ」と呼ぶのではないでしようか。(iv)

美術にしても音楽にしても、こちらに「 」と揺さぶりをかけてくるものに対して、私たちは「カワイイ」などとのんきなことを言っているものでしょうか。囲い込もうにも、こちらの囲いを破って出て行こうとするものを私たちは「カワイイ」とはまず言いません。出て行こうとしてできないものを見て、「まあ、カワイイ！」ということはあるかも知れません。

(清水真砂子著 『大人になるっておもしろい?』を一部改題)

問一 〰 a d のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

問二 《 》 に補うべき語として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア けれども イ つまり ウ なぜなら エ たとえば

問三 「 」に補うべき語として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア ふつつつ イ こつこつ ウ ぐらぐら エ ごしごし

問四 I 〰 IV には絵「A・B」のどちらかがあてはまります。適当な記号をそれぞれ書きなさい。

問五 〰 ① 「赤羽末吉の描く『ももたろう』は『気持ちが悪い』という学生まで現れるようになりまし

問六 〰 ② 「カワイイ」とどここめる」とありますが、それについて次のように説明しました。文章中から指定された字数で抜き出すことで完成させなさい。

力のない自立しようとする子どもに対して、力のある大人が、【 十九字 】状態にしておこうとすること。

問七 〰 ③ 「そんな子ども」とありますが、どのような「子ども」ですか。文章中から二十五字以内で抜き出し、解答欄に合わせ

て書きなさい。

問八 次の一文を補うのに最も適当な箇所を文章中の (i) ～ (iv) の中から選び、その記号を書きなさい。

それでも「カワイイ」はいつこうに消えてゆく気配はありません。

問九 この文章を次の見出しに沿って三段落に分けました。二段落と三段落はどこから始まりますか。初めの五字を文章中から抜き出してそれぞれ書きなさい。

一段落「短大生と考える『カワイイ』の意味」

二段落「研修生に教える『Bのももたろう』の意義」

三段落「大人から見た『カワイイ子ども』の定義」

問十 この文章の展開の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 二枚の絵に関して、筆者と学生や研修生たちとの激しいやりとりをとりあげること、子どもたちの可能性の育て方について説明している。

イ 二枚の絵に関して、筆者と学生や研修生たちとのテンポの良いやりとりをとりあげること、若者の価値観について簡潔に説明している。

ウ 二枚の絵に関して、筆者と学生や研修生たちとの具体的なやりとりをとりあげること、カワイイの意味について詳しく説明している。

エ 二枚の絵に関して、筆者と学生や研修生たちとの和やかなやりとりをとりあげること、ももたろうと教育の関連性について説明している。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「僕」(松岡清澄)は、祖母の影響で手芸や刺繍が好きな高校一年生である。中学時代にその趣味をからかわれ周囲から浮いてしまったことがきっかけで友達ができず、家族からは心配されていた。高校入学後、すぐ後ろの席だった宮多雄大に話しかけてもらい彼のグループに入ることができたが、ゲームの話についていけないことで心から楽しむことができずにいた。

校門を出たところでキヨくん、と呼ばれた。振り返ったその瞬間に、強い風が吹く。

キヨくん。小学校低学年の頃のままに、高杉※1くるみは僕の名を呼ぶ。当時は僕も彼女を「くるみちゃん」と親しげな感じで呼んでいたのだが、学年が上がるにつれて会話の機会が減り、今ではもうどう呼べばいいのかわからない。

「高杉さん。くるみさん。どっちで呼んだらええかな？」

「どっちでも」

名字が高杉というだけで塾の子らに「晋作しんぞく」と呼ばれていた時期があつて嫌だった、なので晋作でなければ、なんと呼ばれても構わな
いらしい。

「高杉晋作、嫌いなん？」※2

「嫌いじゃないけど、もうちょい長生きしたいやん」

「なるほど。じゃあ……くるみさん、かな」①

歩いていると、グラウンドの野球部やサッカー部の声がどんどん遠くなつていく。今日は世界がうつつすらと黄色くて、遠くの山がぼやけて見えた。春はいつもそうだ。すべての輪郭aがあいまいになる。

「あんまり気にせんほうがええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰？」

僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某なにがしらしい。

「私らと同じ中学校やったで」

「覚えてない」

個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上②に「個性を尊重すること、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じったナポリタン・マステイフ。あるいはポメラニアン※4。集団の中でもはやされる個性なんて、せいぜいその程度のも
のだ。犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。

アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。くすくす笑いながらシグサbを真似される。

「だいじょうぶ。慣れてるし」③

けど、お気遣いありがとう。そう言って隣を見たら、くるみはいなかった。数メートル後方でしゃがんでいる。灰色の石をつまみあげて、

「A」と観察しはじめた。

「なにしてんの？」

「うん、石」

うん、石。ぜんぜん答えになってない。入学式の日「石が好き」だと言っていたことはもちろんちゃんと覚えていたが、まさか道端の石を拾っているとは思わなかった。

「いつも石拾ってんの？ 帰る時に」

「いつもではないよ。だいたい土日にかがしに行く。河原とか、山に」

「土日には？ わざわざ？」

「やすりで磨くの。つるつるのぴかぴかになるまで」

放課後の時間はすべて石の研磨にあてているという。ほんまにきれいななんねんで、と言う頬ほおがかすかに上気している。

ポケットから取り出して見せられた石は三角のおにぎりのようなケイジヨウケイジヨウだった。たしかによく磨かれている。触ってもええよ、と言われて、手を伸ばした。指先で、しばらくすべすべとした感触を楽しむ。

「ざつき拾った石も磨くの？」

くるみはすこし考えて、これはたぶん磨かへん、と答えた。

「磨かれない石もあるから。つるつるのぴかぴかになりたくないってこの石が言うてる」

石には石の意思がある。駄洒落だしやれのようなことを真顔で言うが、意味がわからない。

「石の意思、わかんの？」

「わかりたい、といつも思ってる。それに、ぴかぴかしてないときれいやないってわけでもないやんか。ごつごつのざらざらの石のきれいさってあるから。そこは尊重してやらんとな」

じゃあね。その挨拶があまりに唐突でそっけなかったので、怒ったのかと一瞬焦った。

「キヨくん、まっすぐやる。私、こっちやから」

川沿いの道を一步踏み出してから振り返った。ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なリュックが移動しているように見えた。

石は磨くのが楽しいという話も、石の意思という話も、よくわからなかった。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。

ポケットの中でスマートフォンが鳴って、宮多からのメッセージが表示された。

「昼、なんか怒ってた？ もしや俺あかんこと言うた？」

違う。声に出して言いそうになる。宮多はなににも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまったただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。

いつも、ひとりだった。

教科書を忘れた時にギガルに借りる相手がいないのは、心もとない。ひとりで「B」と弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともつとさびしい。

好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。

⑦ 文字を入力する指がひどく震える。

「ちやうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繡の本」

ポケットからハンカチを取り出した。祖母にほめられた猫の刺繡を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。

「こうやって刺繡するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」

ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほどけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がばしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、「C」と涙が滲む。

きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたかないものには触れられない。すくいとって保管することはできない。太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できたらいい。そうすれば指で触れて確かめられる。身にまとうことだって。そういうドレスをつくりたい。着てほしい。すべてのものを「無理」と遠ざける姉にこそ。さらめくもの。揺らめくもの。どうせ触れられないのだから、なんてあきらめる必要などない。無理なんかじゃないから、ぜったい。

どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾を施せばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。それから、明日。明日、学校に行ったら、宮多に例のにゃんこなにかいうゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。

⑧ 靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

(寺地はるな著 『水を縫う』より)

※1 高杉くるみ | 清澄の小学校からの同級生でありクラスメイト。

※2 高杉晋作 | (二八三九〜一八六七) 日本の武士。満二十七歳という若さで死去した。

※3 ナポリタン・マスティフ | イタリア原産の闘犬用の犬種。

※4 ポメラニアン | ドイツ原産の小型犬の犬種。

※5 姉 | 清澄の姉。清澄は結婚を控えた姉のために手作りのドレスを贈りたいと考えている。

問一 ~~~ a ~ d のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

問二 「A」 ~ 「C」 に補うべき語として適当なものを次のア ~ エの中からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

ア しげしげ イ はつきり ウ じんわり エ ぼつん

問三 |——①「……くるみさん」とありますが、「……」が表す「僕」の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア ~ エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 以前は自然に「くるみちゃん」と親しく呼んでいたが、学年が上がるにつれて会話が減ったことで嫌われているかもしれないと思ひ、名前を呼ぶことに不安を感じている。

イ くるみが以前と同じように「キヨくん」と親しく呼んでくることに僕自身が違和感を覚えているため、自分も相手を名前と呼ばないといけない雰囲気を感じている。

ウ 以前は自然に「くるみちゃん」と親しく呼んでいたが、成長とともに会話をすることが減ったこともあり、名前で呼ぶことに対して照れくささを感じている。

エ 以前は「くるみちゃん」と親しく呼んでいたが、久々に会話をしたことでくるみのことを好きだった当時の気持ちがよくあがり、名前を呼ぶことに緊張している。

問四

——②「学校以上に『個性を尊重すること、伸ばすこと』に向いていない場所は、たぶんない」とありますが、「僕」がそのように考えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 学校の中で受け入れられる程度の個性は認められ評価されるが、その個性が学校での基準を超えると世の中では評価されている個性だとしても排除されるから。

イ 学校は世間の常識や価値観を身につけさせる場所であり周囲との協調性が最も重要視されるため、強い個性をもった人物がいると学校の秩序が乱れてしまうから。

ウ 学校は個性の強い優秀な人材が集まる場所であるため、その個性が中途半端なものであると周りに埋もれてしまい評価されなくなってしまうから。

エ 友人や世間から評価される個性であったとしても、学校の中では先生に認められ評価されないと意味をもたないものとして排除されてしまうから。

問五

——③「慣れてるし」とありますが、「僕」は何に「慣れて」いるのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、その記号を書きなさい。

ア 「僕」の趣味である刺繍の出来映えが悪く、クラスメイトから馬鹿にされること。

イ 「僕」の趣味である刺繍のことをクラスメイトに理解してもらえず、浮いた存在になること。

ウ 「僕」は友人を作ることが苦手であるため、帰り道がいつも一人であること。

エ 「僕」がクラスメイトに話しかけると無視されて、周囲の人からくすくす笑われること。

問六

——④「これはたぶん磨かへん」とありますが、くるみが「磨かへん」のはなぜですか。その理由を二十五字以内で文章の中から抜き出して書きなさい。

問七

——⑤「怒ったのかと一瞬焦った」とありますが、「僕」がそう考えたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア くるみの石の話をきちんと聞いていたのに、突然「じゃあね」と言われたため。

イ くるみの石の話に対して、適当に相槌あいづちをうつていることがばれたと思ったため。

ウ くるみの荷物が重そうなことに気づきながら、気のきいた言葉をかけなかったため。

エ 石を拾うことに集中したいくるみに対して、次々と質問を投げかけてしまったため。

問八

——⑥「その」が指す内容を文章中から十字程度で抜き出して書きなさい。

問九

——⑦「文字を入力する指がひどく震える。」とありますが、「指がひどく震える」のはなぜですか。その理由して最も適当なものを次のア～エから選び、その記号を書きなさい。

ア ひとりの状態に戻ってしまふ覚悟でゲームに興味がないという自分の本当の気持ちを打ち明けようと思っているが、それによってクラスメイトの態度が変わってしまうことを恐れているから。

イ 宮多たちのグループと決別しようとして心に決めて刺繍が好きだという自分の本当の気持ちを打ち明けようと思っているが、今まで友達でいてくれた宮多を裏切ってしまうことに罪悪感があるから。

ウ 刺繍が好きだという自分の本当の気持ちを知ってほしいと思っているが、伝えることによって宮多たちとの関係が気まずくなってしまう孤立してしまうかもしれないと不安を感じているから。

エ ゲームに興味がなくひとりでいたいという自分の本当の気持ちを伝えたいと思っているが、どのようにすれば自分の強い気持ちが伝わるか悩み迷っているから。

問十

——⑧「靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。」とありますが、この時の「僕」の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、その記号を書きなさい。

ア ゲームに興味はないが好きになれるように努力するとともに、これからは刺繍以外の趣味を大切にしておくことでクラスのみんなど仲良くしていこうと決意している。

イ 自分の好きなものをこれからは堂々と好きでいようと決意するとともに、宮多たちの好きなものを理解しようとするのでよりよい友人関係を築いていけると期待している。

ウ これからも自分の好きな刺繍を極めていきひとりで生きていくという覚悟を決めるとともに、今後は刺繍の練習を重ねていくことで将来の仕事にしようと思決意している。

エ ゲームを好きな宮多たちを見下した感情でみていた自分自身を反省するとともに、刺繍の良さを伝えることで宮多たちにも刺繍をはじめてもらいたいと期待している。

問十一 この文章の内容と合致しないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 学校では刺繍が趣味の男子生徒が少ないため、その珍しさから松岡清澄はクラスメイトの山田にからかわれたり真似されたりしている。

イ クラスメイトからの評価を気にするのではなく自らの好きなことに堂々と熱中している高杉くるみの姿に、松岡清澄は好感をもっている。

ウ 松岡清澄は自分の趣味のことを誰にも理解してもらえないと決めつけていたが、宮多からのメッセージで認めてもらえたいと思ひ喜びを感じている。

エ 高杉くるみは独自の感性があり自らの価値観を大切にしているが、他人の気持ちや周囲の状況などを気遣うことはできない人物である。

【三】 次の問いに答えなさい。

問一 次の語群の中の漢字を用いて四字熟語を三組つくり、それぞれ漢字で書きなさい。ただし、それぞれの漢字は一度しか用いないものとします。

語群

石	・	口	・	八	・	二	・	鳥	・	同
一	・	倒	・	異	・	転	・	音	・	七

問二 (1)～(3)の——はどの言葉を修飾していますか。その言葉を文中から一文節で抜き出して書きなさい。

- (1) 突然空が明るく光り、雷鳴がとどろいた。
- (2) もし昨日雨が降らなかつたら運動会は行われていただろう。
- (3) 青く澄んだ大きな瞳に小さな子どもがひとりだけ映っている。

問三 (1)～(3)の——の働きの説明として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

- (1) 「『どこの病院を受診するのがよいでしょうか?』」
- (2) 「きれいな湖の見える丘にご案内します。」
- (3) 「あなたのような人に出会えて、とてもうれしいです。」

ア 主語であることを示す

イ 連体修飾語であることを示す

ウ 体言と同じ役目を示す

エ 疑問の意味を示す

オ 下に続く言葉と並立の関係を示す